

パニウム - 第十五番

「250」の三倍

Jeff Pippenger

2026-02-19

2026年、トランプはアメリカの「250」周年を祝う予定であり、これは、ラフィアの戦いとパニウムの戦いの間の歴史において、紀元前457年からアンティオコス・マグヌスに至る「250」年と符合する。「250」年の終わりに、アンティオコス・マグヌスは紀元前207年に立つ。ラフィアの戦いの10年後、パニウムの戦いの7年前である。「250」年という証しはまた、異教ローマの「250」年の期間とも符合する。すなわち、64年にネロがキリスト者迫害を開始し、「250」年後の313年、ミラノ勅令においてコンスタンティヌス大帝がキリスト教を合法化し、迫害は終結した。

ドナルド・トランプは「アメリカを再び偉大にする」ための取り組みで知られており、それは彼の支持者を示す呼称-MAGA-ともなっている。預言において、トランプはコンスタンティヌス大帝とアンティオコス大王によって類型化され、そしてもちろん『ダニエル書』第11章冒頭の数節においては、彼はキュロス大王、クセルクセス大王、さらにその後にはアレクサンドロス大王である。紀元前457年のキュロス、ダレイオス、アルタクセルクセスの勅令からパニウムの歴史に至るまでが二百五十年である。この「250」年の終点はラフィアとパニウムの間の中点にあり、2026年も同様である。2026年はトランプの第二期の中間に当たる。ネロの「250」年の迫害は、キリスト教迫害を終結させる勅令へと至る。キュロス、ネロ、トランプによって表される三本の「250」年の線のうち、ネロの線は中間の線である。

キュロスが第一の勅令を発し、アルタクセルクセスが第三の勅令を発した。キュロスは第一の天使であり、アルタクセルクセスは第三の天使である。私は、合わせて紀元前457年を画定する三つの勅令全体の象徴としてキュロスを用いることとする。

キュロスは、紀元前457年に「250」年の期間を開始し、それはパニウムの歴史、すなわちアンティオコス大王（ドナルド・トランプ）の歴史において終わる。パニウムは日曜法の直前の聖句である。キュロスは、地の獣の共和主義の角を表す歴史における「250」年の期間の始まりを画し、また、地の獣のプロテスタント主義の角を表す歴史における2,300年の期間の始まりも画する。

ネロは、迫害が妥協へと至ることを表象する歴史の系列を開始する。預言的期間の中点で終結する系列を表すキュロスおよびアメリカ合衆国とは異なり、ネロの系列は、313年のミラノ勅令に始まり、321年の最初の日曜法、さらに330年のローマの東西分割へと続く、漸進的妥協の期間の例証をもって終わる。これら三つのすべての日付において、コンスタンティヌスが表されている。ネロの系列では、313年から330年までは17年である。キュロスの系列でも、紀元前217年のラフィアの戦いから紀元前200年のパニウムの戦いまで、同じく17年である。

ダニエル書第十一章では、アルタクセルクセスによる勅令が第三の勅令である。第三の勅令は、第三の天使と日曜法を表す。紀元前457年からの「250」年と1776年からの「250」年は、いずれも、第十六節の日曜法の直前に生起する歴史のただ中で終結する。第十一章は、最終的に、第十節が1989年の歴史を表し、第十一節が2014年に始まったウクライナ戦争の歴史を表し、さらに第十三節が2024年にトランプが二期目に復帰することを表し、そして第十四節が、栄光の地からの最初の教皇が外的な幻を確立する中で2025年を指し示す、という諸節を掲げている。

ダニエル書11章40節は、ヨハネ・パウロ二世とロナルド・レーガンとの間の秘密の同盟によってソビエト連邦が打倒された1989年に成就した。その1989年の終わりのときにおける秘密の同盟は、1989年に始まった預言的期間の終わりにおける公然の同盟を予表した。その公然の同盟こそが、幻を確立する。

2026年は、「250」年に及ぶ預言的歴史の終結であり、その期間は、1776年から1798年の「終わりの時」に至る二十二年をもって始まった。その始まりの歴史の二十二年は、9/11から2023年に至る二十二年の歴史に反映されている。1798年におけるその二十二年の終わりに、ダニエル書の封印は解かれた。次いで、9/11に始まり2023年12月31日に終わった二十二年の終わりに、ユダ族の獅子がイエス・キリストの啓示の封印を解き始めた。

1798年、二十二年の終わりに封印が解かれたメッセージは、1611年に欽定訳聖書が刊行されてから二百二十年後の1831年に、公の場へと出された。1798年から1831年に至るまで、神の預言のことばは段階的に開かれていった。1831年までにはそれは公の場にあり、男も女も、1798年に封印が解かれたそのメッセージに対して責任を負うべき立場に置かれた。そして1840年には、ホワイト姉妹の言う「もう一つの顕著な出来事」が起こった。イスラムに関する予言が成就したときである。

二十二年にわたる期間の終結（1798年）から、二百二十年にわたる期間の終結（1831年）に至るまで、メッセージの封印が解かれる期間が示されている。この図には、メッセージが定式化される道標が含まれており、そののちに予告を指し示す道標が続く。その予告はさらにのちに再計算され、さらにそののちにそれが実現するとき、「神の力の驚くべき顕現」の開始を指し示す道標が生じる。

1989年の運動の終末に位置づけられる二十二年の期間は、9/11から、再び一つの預言の封印が解かれた2023年に至るまでであった。その預言は必然的に、知識の増大の時期を開始するであろう。その知識は人々を試し、選別するものである。というのも「多くは召されるが、選ばれる者は少ない」からである。やがて、そのメッセージが公の場に提示される時点が訪れる。そのメッセージは、預言的に再計算されたメッセージであるという特質を帯び、さらに再び一つの予告を含むであろう。そしてその公に出された予告が成就するとき、そのメッセージは、1840年と五旬節の歴史に示されているように、力を受けるであろう。

1989年のソビエト連邦の崩壊により、ダニエル書11章40節の封印が解かれ、そして1996年にはダニエル書11章のメッセージが公の場に提示された。1996年は1776年から220年後であり、1776年は1798年に終結する22年間の始まりであっただけでなく、2026年に終わる250年間の始まりでもあった。共和党の角は2026年の中間選挙において折り返し点に達

し、プロテスタントの角は2026年に至るが、この2026年は、1989年の終わりの時に封印が解かれ、1996年に正式化されたそのメッセージを起点とする30年の期間の終わりである。イエスは常に初めをもって終わりを示されるゆえに、2026年は、1989年に封印が解かれたメッセージが1996年に正式化されてから30年を経て、訂正された「真夜中の叫び」のメッセージが正式化される年である。

1776年に始まる「250」年の線は、2026年、すなわちドナルド・トランプの中間期へと至り、ろばが解き放たれ、イスラームが9/11の時と同様に再びアメリカ合衆国を襲撃する時に始まるアメリカ合衆国とロシアの戦いの直前である。

ネロの「250」年の線は、歴史的にも予言的にも、三本の線のうち中間の線である。これによって、ネロの線は第二の天使、すなわち第三の試練に先行する第二の試練であると識別される。その第二の試練は「獣の像」の試練であり、313年のミラノ勅令により型として示される教会と国家の結合の漸進的な樹立を表している。それはさらに321年に公布された最初の日曜令へと導き、ついには、330年の歴史によって表象されるように、日曜令の後に常に続く国家的破滅へと至った。

313年のミラノ勅令は、第十六節にいう日曜法へと段階的に至る、アメリカ合衆国における教会と国家の関係の樹立の始まりを指し示している。その働きは9/11において愛国者法によって始まったが、封印の時の終わりに位置するフラクタルにおいては、愛国者法とミラノ勅令の双方が、間もなく到来する日曜法へと至る妥協の漸進的期間を開始させる一つの行為を型として示している。これは、アメリカ合衆国において教会と国家を直接に結合させ、究極的には日曜法へと導く、一連の預言的行為の最初のものである。

313年のミラノ勅令は、その史的記録の中にまさにこれらの要素を含んでいる。というのも、それは単一の勅令ではなく、ローマ帝国東部を統治していたリキニウスによる一連の書簡であったからである。当時、帝国東部は依然として強固な異教性を保っていたが、これに対してコンスタンティヌスは西方の支配領域をキリスト教に開放しつつあった。合意そのものは313年2月の会談の折に成立し、その場でリキニウスは同盟を確固たるものとするため、コンスタンティヌスの異母妹と婚姻した。帝国東部で公布されたりキニウスの書簡は、キリスト者およびその他すべての者に対する礼拝の自由を保障するとともに、キリスト者から没収されていた財産の返還を命じた。

ミラノ勅令は「250」年に及ぶ迫害を終結させるとともに、世界がトランプと歩調を合わせて間近に迫る日曜法へと進む中で、この勅令によって保障されたすべての自由がキリスト者から漸次的に剥奪されていくことになる時期を象徴している。

読者が、間もなく到来する闘争で用いられる手段を理解したいなら、過去の時代にローマが同じ目的のために用いた手段の記録をたどりさえすればよい。教皇派とプロテスタントが結託して自分たちの教義を退ける者たちにとのように対処するかを知りたいなら、ローマが安息日とその擁護者たちに対して示した精神を見ればよい。

世俗権力に支えられた君主の勅令、公会議、教会法規は、異教の祭日がキリスト教界において栄誉ある地位を獲得するに至るための階梯であった。日曜日遵守を強制する最初の公的措置は、コンスタンティヌスによって制定された法令（西暦321年）であ

った。この法令は、都市住民には「太陽の尊き日」に休むことを命じる一方、農村の人々には農事の継続を許した。それは事実上異教的な法規であったが、皇帝が名目上キリスト教を受容した後にも、皇帝によって施行された。The Great Controversy, 573, 574.

『250』の十分の一である『25』という数は、反逆と分裂を表している。エゼキエル書第八章で太陽にひれ伏す、ラオデキア的アドベンチズムの『25』人の指導者たちは、直後の章で封印を受ける者たちから分離されており、ホワイト姉妹はエゼキエル書第九章の封印を、黙示録の十四万四千人の封印であると明確に特定している。その『25』人は、コラ、ダタン、アビラムの反逆に加わった名のある『250』人の十分の一にすぎない。ホワイト姉妹は1888年の総会から去ることを禁じられた。ガブリエルが、彼女はとどまってミネアポリスの反逆を記録しなければならないと告げたからである。というのは、それはコラの反逆の繰り返しであったからである。『250』は反逆と分離の象徴である。マタイによる福音書第二十五章には、悪しき者と賢い者の分離を教える三つのたとえがある。共和主義とプロテスタント主義の角はいずれも、四代として表象される恩恵期間に服しており、契約の民も、契約の民が存立している国も、同一の期間において裁かれる。

地から上ってくる獣（聖書予言における第六の王国、すなわちアメリカ合衆国）の「250」年の期間において、ネロの系列は、ミラノ勅令によって表象される一つの勅令を指し示している。その勅令は、法的闘争の段階的な激化の始まりを画し、その激化は321年の日曜法の勅令において結末に至り、そこから、330年に全世界が東と西として表象される二つの階級に分割されることで締めくくられる一時期が導入された。321年から330年までのその九年間は、また、321年の日曜法に始まり、330年にミカエルが立ち上がり、恵みの期間が閉じられるときに終わる、仮庵の祭りの七日間でもある。

「幻を確立するのはローマである」というミラー派の基礎的理解を拒むことは、2023年12月31日に到来し、2025年5月8日に「栄光の地」出身の最初の教皇が選出されたときに終結した基礎試験に落第することにほかならない。ウィリアム・ミラーが、幻を確立する象徴としてローマを認識することを可能にしたその基礎的真理こそ、もしそれを拒むなら「強い惑わし」を招く真理である。その最初の試験に落ちることは、テサロニケ書のいう「強い惑わし」を招来し、理解しない愚かな者たちは「真理」を愛していないことを証明する。外的な幻を確立する象徴を拒むことは、基礎試験を拒むことであり、それは三つの試験の第一である。ホワイト夫人は、キリストの時代における第一の試験を、バプテスマのヨハネのメッセージと一致させている。彼女は、ヨハネのメッセージを拒んだ者は、イエスの教えによって益を受けることができず、また、キリストが外庭から聖所へと移られたときの経綸上の変化を見分けることもできなかつたと指摘する。

彼女は、その漸進的な試練の過程をミラー派の時代に対応づけ、第一の天使のメッセージを拒んだ者たちは、ヨハネのメッセージを拒んだユダヤ人に並行すると教えている。各歴史的系譜において、最初の試練に失敗した者は次の段階から益を受けず、キリストの経綸的变化に盲目となった。9/11のメッセージを拒んだ者たちは、キリストが生ける者の審判を始めていたことを見ることができなかつた。2023年の基礎的な試練に失敗する者は、戦う教会から凱旋の教会への移行的変化を見ることはない。これらの基礎的試練のいずれかを拒む者たちは、「完全な暗黒」に至った。異象のないところでは、民は完全な暗黒

に至り、外的異象の光を打ち立てるのはローマである。この真理は、ダニエル書十一章の十節、十一節、十五節の三つの戦いに立っている三人の大統領との関係における三人の教皇の中に認めることができる。

ラフィアの戦いからパニウムの戦いに至ることで画される十七年期のただ中、紀元前207年に終わった外的な「250」年のキュロスの線は、ネロに始まり313年のミラノ勅令で終わる「250」年の線と符合し、これによりコンスタンティヌス大帝の十七年期が示される。紀元前207年、すなわち2026年において、ドナルド・トランプはアンティオコス大王として立っており、また313年においてはコンスタンティヌス大帝としても立っており、その時は「獣の像」の試みの期の初頭である。2026年7月4日、アンティオコス大王として、またコンスタンティヌス大帝としてのトランプは、アメリカを「偉大」ならしめている。十節、十一節、十五節に記された三つの戦いに符合する三人の大統領のうち、トランプは第三である。これら三人のうち第一はレーガン、第二はオバマであった。これら三人の大統領は「真理」の印を帯びており、レーガンとトランプは第一と第三であるのみならず、アルファとオメガをも表している。

各大統領に共通する預言的特質は、在任中に同時代の教皇と同盟関係を結ぶことである。レーガンとヨハネ・パウロ二世は、ダニエル書11章10節および40節の成就として1989年にソ連を打倒するにあたり、秘かに提携していた。レーガンとトランプの中間にあたる、ウォーク的なグローバリスト大統領オバマは、ウォーク的な教皇フランシスコと思想的に一致していた。トランプの教皇レオとの同盟は誰の目にも明らかであり、2025年にはトランプが大統領に就任し、レオは反キリストとして就任した。大統領と教皇の霊的關係は、イゼベルとバアルの預言者たちによって象徴される。大統領と教皇の政治的關係は、イゼベルとアハブによって象徴される。いずれの象徴においても、イゼベルが頭である。

最後の危機に近づくにつれて、主の器たちの間に調和と一致が存在することは死活的に重要である。世界は嵐と戦争と不和で満ちている。しかし、一つの頭-すなわち教皇権-のもとで、人々は神の証人たちを通して現れる神に敵対するために一致するであろう。この結合は大いなる背教者によって固められる。彼は真理に対する戦いにおいて自分の手先たちを結束させようとする一方で、その擁護者たちを分裂させ、散らそうと働く。嫉妬、邪推、中傷は、彼によってそそのかされ、不和と分裂を生じさせる。『証言』第7巻、182頁。

不義がはびこるこの時代に、『主はこう言われる』を退けたプロテスタント諸教会は、異様な局面に至るだろう。彼らは世俗化する。神から離れているがゆえに、虚偽と神からの背教を国家の法としようとするだろう。彼らはこの国の支配者たちに働きかけ、神の宮に座して自分こそ神であることを示す「罪の人」の失われた優位を回復するための法律を制定させるだろう。ローマ・カトリックの原則は国家の保護のもとに置かれる。神の律法を生活の規範としてこなかった者たちは、聖書の真理による抗議をもはや容認しないだろう。Review and Herald, 1897年12月21日。

バアルの偽預言者たちはイゼベルの食卓で食した。イゼベルは王妃であり、その預言者たちは彼女の預言者であった。ダニエル書第11章40節において、レーガンは軍事力の象徴である「戦車」と「騎兵」、さらに経済力の象徴である「船」によっても表されていた。しかし、その節において「北の王」であるのは教皇権である。預言的には、レーガンはイゼ

ベルに従属していた。その時期、教皇ヨハネ・パウロ二世が他のいかなる教皇にも増して世界を巡歴したゆえに、世界は獣に驚嘆して従った。著名なイエズス会士の著述家であるマラキ・マーティンは、その著『Keys of This Blood』において教皇ヨハネ・パウロ二世について記した。同書の明示された前提は、ヨハネ・パウロ二世とレーガンの時代に、世界は教皇権、アメリカ合衆国、ソビエト連邦の間で世界支配をめぐる三つ巴の闘争にあった、というものであった。マーティンは、その闘争において教皇権が勝利すると予測した。レーガンと反キリストとの秘密同盟は、ダニエル書第11章40節以降に示されているように、教皇権の致命的な傷を癒す運動が始まったことを告げ知らせた。マーティンの書は、プロテスタントのアメリカを掌握するという、教皇権が長年抱いてきた目標を改めて明言した。レーガンが、教皇が聖書預言の反キリストであるという事実を看過する用意があったのは、彼自身の証言によれば、ソビエト連邦こそが聖書預言の反キリストであるとする誤った適用に基づいていた。

「言葉についての理解が混乱し、反キリストの意味を見抜けない者は、必ずや自らを反キリストの側に置くことになる。」 クレス・コレクション、105。

ダニエル書第十一章の冒頭の諸節において指し示される八人の大統領の最初がレーガンであり、またその八人のうち反キリストと預言的關係を有する三人の最初でもある。レーガン、オバマ、トランプの三つの同盟の象徴において、真理の証印を識別することができる。最初であるレーガンは最後の型であり、レーガンとトランプの多くの並行関係は驚くべきほど豊富である。ヘブライ語の「真理」という語を形づくる三つの段階の中間の道標は反逆であり、その典型がオバマの大統領職である。2025年5月8日、史上初めて米国出身の教皇が就任し、レーガンの秘密の同盟はトランプの公然の同盟へと到達した。2025年、教皇制は、1798年以来その闘争のまさに標的であった米国という「麗しの地」出身の教皇を公然と擁立した。マラキ・マーティンの予言が成就するために残されていたのは、竜と獣と偽預言者から成る三者連合が実現する日曜法だけであった。

「神の律法に反して教皇制度の確立を強制する布告によって、わたしたちの国は義と完全に縁を切ることになる。プロテスタント主義が深い隔たりを越えてローマの権勢の手を取ろうと手を差し伸べ、さらに深淵を越えて心霊主義と手を結び、この三重の連合の影響のもとに、わが国がプロテスタントかつ共和政の政府としての憲法のあらゆる原則を否認し、教皇的な虚偽と惑わしの流布のための規定を設けるとき、わたしたちは、サタンの驚異的な働きがなされる時が来ており、終わりが近いことを知るのである。」 『証言』 第5巻、451頁。

2026年7月4日、トランプは自らの大統領任期の中間点に位置しつつ、その「250」年を祝う意向である。その中間点は、ラフィアの戦いとパニウムの戦いの間に当たる紀元前207年である。その十七年の中間点はまた、313年を表象するネロの十七年間の開始をも指し示し、さらに321年の「日曜令」および第十六節のそれへと導く、教会と国家による「獣の像」の漸進的な樹立をも指し示す。その期間は、313年に、西方のコンスタンティヌスの継娘と東方のリキニウスとによって表象される東西の婚姻によって始まる。東西間の婚姻同盟によって始まるその期間は、東西の分離、すなわち離婚によって終わる。中間の道標は最初の「日曜令」である。

レーガン、オバマ、トランプは、黙示録第十四章において三人の天使として表象されている永遠の福音の三段階によって、預言的に規定されている。第二段階に当たるオバマ政権期には、二人の教皇が存在した。“ウォーク”の教皇フランシスコは、1981年11月25日から2005年4月19日に教皇に選出されるまで教理省（CDF）の長を務めたヨーゼフ・ラッツィンガー（のちの教皇ベネディクト十六世）の後を継いだ。ラッツィンガーは退位し、フランシスコが在位を開始し、その結果、オバマ政権期に二人の教皇が並存することとなった。

オバマは、異性愛者と同性愛者の双方を兼ねると非難されており、またムスリムでありつつ、背教的プロテスタント・アメリカの偽預言者の象徴でもある。しかも彼が属する宗教であるイスラームは、偽預言者ムハンマドの宗教でもある。オバマは、栄光の地の政治体制-すなわち黙示録十六章の偽預言者-の代表であったが、彼の実際の政治的傾向は、グローバリスト-竜-に与していた。オバマは預言的に統合失調症的であり、二つの偽宗教、二つの性的指向、二つの政治体制を体現している。そして彼の在任中には、二人の反キリストが存在した。性的指向であれ、政治的立場であれ、宗教的信条であれ、オバマはそれぞれの領域においてクローゼットの中に留まり続けることに固執した。アメリカ国民を互いに分断させるための彼の努力ゆえに、ある者たちから「分断者オバマ」と呼ばれているが、これはまた、彼の秘匿された個人的・政治的・宗教的信条にも反映されている。

オバマの治世の第一の反キリストは、教皇となる以前、二十四年間にわたり教理省を率いていた。教理省は、もとは「異端審問所」と呼ばれていた機関に与えられた現代の名称である。オバマ期の反逆は、ヘブライ語で「真理」を意味する語における「13」という数に符合する。その語は、ヘブライ文字の第一文字（レーガン）、第十三文字（オバマ）、そして第二十二文字（トランプ）から成っている。異端審問は、確かに反逆の象徴である。教皇ベネディクトは2013年、イスラームの偽預言者および背教的プロテスタンティズムの象徴の統合失調症的な治世のさなかに、退位して教皇座をフランシスコに譲った。

永遠の福音における第二の段階は視覚的な試験であり、オバマと二人の教皇の関係において見て取れるのは、異端審問所に代表される迫害と、いわゆる「ウォークの教皇」によって表される母なる地球の崇拜へのグローバリストの執着との結びつきである。オバマのイスラーム教徒としての信仰は、イスラームによって引き起こされる諸国民の激怒と、「プロテスタント」という名称に示される責務を果たすことにおける背教的プロテスタントの失敗とを表している。プロテスタントはローマに抗議する者であり、決してローマに屈してはならない。

三人の教皇のうち最初の者は、自分がカトリックにおけるファティマの導きの預言にいう「善き教皇」であると信じていると、世界に向けて表明する。ヨハネ・パウロ二世は、自らをファティマの「善き教皇」であると信じており、教皇権、アメリカ合衆国、そしてグローバリストの三つ巴の闘争が終結したときに、その「善き教皇」が鉄の杖をもって最終的に全世界を統べ治めることになることと信じていた。

次期大統領政権は、竜に属するグローバリストたちの役割、イスラームが諸国民を怒らせること、そして背教的プロテスタンティズムがプロテスタントであることに失敗していることを明らかにする。

2025年に就任したトランプ政権は、2025年の反キリストと公然と歩調を合わせる。ローマとアメリカ合衆国のこれら三つの同盟の光は、ラフィアの戦いの終結とパニウムの戦いの開始という歴史の中で封印が解かれる。十七年の初めにおけるリキニウスとコンスタンティヌスの両王国の婚姻は、2025年の同盟を表す。

2025年の同盟は、「十人の乙女のたとえ」の偽版である。まず婚姻が挙行され、その後、最終的に婚姻の第二段階へと至らせる調査の期間があり、そこで婚姻が完遂され、戸が閉ざされる。「十人の乙女のたとえ」の偽版は2025年に始まり、ダニエル書11章16節および41節の、間もなく到来する日曜法において完結する。その偽りの婚姻においては、父はサタン、花婿は教皇権、花嫁は背教的プロテスタント・アメリカである。ダニエル書11章14節では、「ダニエルの民を略奪する者たち」はローマであり、幻を確立するのは彼らである。ローマを幻を確立する象徴と見なしたウィリアム・ミラーの同定を拒むことは、第一の天使のメッセージおよびバプテスマのヨハネのメッセージを拒むことに等しい。現今の反キリストが2025年に就任したとき、彼は「八人の大統領」の幻を確立し、14節を成就した。

私たちは今、神殿の試練の中にいる。これは、リトマスの試練および第三の試練に先立つ第二の試練である。

これらの内容は次回の記事で続けます。